

第8回 こども急性疾患学寄附講座(神戸市)公開講座

# 「こどもの健康を守る」

日時 2013年7月13日(土) 13:00~14:30

場所 神戸こども初期急病センター 2階「なぎさホール」

先着順  
参加費  
無料

◎ あいさつ

◎ 公開講座

① 13:00 ~ 13:30

思わぬ事故から子どもたちを守るために

講師 神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野こども急性疾患学部門

特命助教 忍頂寺毅史

② 13:30 ~ 14:00

こどもの発熱・嘔吐・けいれんの時の対応

講師 神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野こども急性疾患学部門

特命助教 中川 卓

③ 14:00 ~ 14:30

こわい感染症から子どもたちを守る予防接種

講師 神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野こども急性疾患学部門

特命教授 竹島泰弘



神戸市中央区脇浜海岸通1丁目4番1 (HAT神戸内)

● 阪神電車「春日野道」駅から南へ徒歩約8分

● JR「灘」駅南口より南へ徒歩18分

※満席の際には入場できない場合もございますので、ご了承ください

※託児施設はありません



お問い合わせ先

神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野こども急性疾患学部門  
TEL (078) 382-6090

主催：神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野  
こども急性疾患学部門 (寄附講座)

後援：神戸市・神戸市医師会・神戸市小児科医会

# 思わぬ事故から子どもたちを守るために

神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野こども急性疾患学部門  
忍頂寺 毅史

子どもの事故は病気と同様で、決して少なくありません。1年間に0歳児では1/4が、1～4歳児では1/3が病院を受診するような事故にあっています。また死因から見るとガンや心臓病よりも、事故でなくなる子どもの方が多いという統計もあります。

事故の大半は交通事故ですが、家庭で起こる事故も少なくありません。成長とともに起こる事故は異なり、発達段階に応じた事故予防が必要となります。本講座では家庭内や身の回りで起こりやすい事故を発達に応じて解説し、簡単にできる予防・対策の方法をお話します。また事故が起こってしまったときの応急処置や、どんなとき受診を急がなければならないか等、病院のかかり方も概説します。

MEMO:

# こどもの発熱・嘔吐・けいれんの時の対応

神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野こども急性疾患学部門  
中川 卓

こどもの体調不良は突然始まることが多く、それが夜中であったり外出先であったりしてすぐにかかりつけ医を受診できず、保護者の方はどう対応したらよいのか困ることがあると思います。今回、こどもの体調不良症状として重要な発熱、おう吐、及びけいれんの3つの症状について、特に注意すべき点や具体的な対応法について解説いたします。以下にいくつか大切なポイントを示しますので、救急受診や自宅療養に生かしてください。

## 1) 発熱について

生後3か月未満の赤ちゃんが発熱することは稀で、発熱した時点で無菌状態であるべき血液の中で細菌が増殖してしまっている危険な状態になっている場合があります。生後3か月未満の赤ちゃんの発熱は、速やかにこども初期急病センターを受診してください。

もう少し大きなこども達の始まったばかりの発熱は、たいてい全身ではなくて体のどこか一部に炎症があることを示しています。最も頻度が高い原因はウイルスがのどで炎症を起こす咽頭炎（カゼ）です。このような発熱は、氷枕で頭を冷やしたり解熱剤を使用したりして対応し、翌日かかりつけ医を受診することで大丈夫なことがほとんどです。

## 2) おう吐について

原因は様々ですが、短時間のうちに5回以上おう吐したりぐったりしてしまっている場合は、ひどい脱水や待てない低血糖が起こっている可能性があります。おう吐物に血が混ざったり、緑色（胆汁色）をしている場合も迅速な対応が望まれます。これらの場合は、速やかにこども初期急病センターを受診してください。最も頻度が高い原因はウイルス性腸炎で、この場合は、重症度に応じて随時治療を考える必要があります。

## 3) けいれんについて

生まれて初めてのけいれん、10分以上続くけいれん、24時間以内に2回以上繰り返すけいれん、けいれんの後ぼーっとして意識がおかしい状態が続く場合は要注意ですので速やかに医療施設を受診してください。けいれんの原因として多いものは、乳幼児では熱性けいれん、学童ではてんかん発作です。どちらも、たいてい5分以内に発作が頓挫して、その後10-20分くらい眠り、後遺症なく回復します。稀ですが中枢神経（脳）の感染症、低血糖、中毒、脳卒中などが原因であることがあり、医療施設で迅速かつ適切な対応が必要になります。

# こわい感染症から子どもたちを守る予防接種

神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野 小児急性疾患学部門  
竹島 泰弘

子どもの病気の多くは自然に軽快することが多いですが、中には重篤な合併症を呈し、命に関わることもあります。そのため、子どもが発熱・咳・嘔吐・発疹などの症状を呈すると、親としては心配です。このような急病から子どもを守るための方法の一つに、予防接種があります。日本では、三種混合、BCG、ポリオ、麻疹（はしか）・風疹混合、日本脳炎ワクチン、インフルエンザ菌b型（ヒブ）、肺炎球菌ワクチンが定期予防接種として行われており、それ以外に任意の予防接種インフルエンザ、水痘（みずぼうそう）、流行性耳下腺炎（おたふくかぜ）ワクチンなどが行われています。本講演では、予防接種に関する最近の話題の中から以下のものを中心に話をします。

1. 2008年からインフルエンザ菌b型（ヒブ）、2010年から肺炎球菌（7価）ワクチンの接種が開始され、本年4月から定期接種となりました。これらは乳幼児に髄膜炎などの重篤な感染症を引き起こす細菌感染から子ども達を守るものです。
2. 風疹の大流行が、毎日ニュースで報じられています。子どもが風疹に罹患することを予防することが重要であるのはもちろんですが、それと合わせて、妊婦さんが罹患することを予防することも重要です。妊娠初期に風疹に罹患しますと、胎児が先天性風疹症候群（目・耳・心臓の症状が出ます）を発症することがあるからです。そのため、風疹の予防接種は大切です。
3. 従来、ポリオは生ワクチンでしたが、予防接種関連のポリオの発症が問題になりました。そして、昨年从不活化ポリオワクチンによる定期接種が開始されました。その経緯を、振り返ってみます。
4. その他

MEMO: